

東急王国に行く その2 目黒線と多摩川線の旅

三月に池上線の旅を体験したら、目黒線と多摩川線にも乗りたくなり、第二弾に着手することにした。四月も終盤に入り、桜見物の喧騒も治まったと思われるので、いよいよ実行。八千代台駅から、11時過ぎの電車で目黒に向かう。目黒駅のビルの中で昼食用にパンと飲み物を買って、東急目黒線の駅に向かう。東急の目黒駅は大きく様変わりして、ここが始発駅ではなくなった。都心を走る地下鉄が入ってきて、出て行く。入ってくる電車は、地下鉄と地下鉄を介して結ばれた埼玉県方面から。出て行く先は、多摩川を渡って神奈川県のような方角へと飛んでいく。行先表示板を見ていると、その多岐にわたる様が愉快地感じられる。

<1> 目黒線の旅(目黒から多摩川へ)

●目黒

目黒と言う地名の由来は諸説あって、いずれが真説かはわかっていないらしい。駅の東側は海拔30mを超える白金台地の末端で、海拔25mほどある。駅の西側は、海拔3~5mの目黒川の谷に向かう傾斜地で、権之助坂・行人坂など名のある坂が並ぶ。まずは、各駅停車新横浜行に乗って・・・



●不動前

最初の停車駅不動前で下車。駅から北西へ約1Kmのところ目黒不動尊があることで、この駅が生まれた。正式名称は「天台宗叡山護国院瀧泉寺」。

(写真右)

大同3年(808年)、慈覚大師円仁が15歳の時、師に伴われて故郷の下野國から比叡山へ向かう途中でこの地に立ち寄った。その晩恐ろしい形相の者が夢の中に現れてお告げがあった。翌日その形相をそのままに彫った像を本尊不動明王として、堂宇の建造を決意したと言われている。

□蛸薬師=正式名称は「天台宗不老山薬師寺成就院」。天安2年(858年)慈覚大師が開山。唐からの帰途で嵐に遭い持ち帰った薬師如来像を海に投げ込んで危急を逃れた。のちに、蛸の上に乗って水上に浮かび出たことで像が大師の手に戻ったことからその名が付いたという。

□安養院=天台宗臥龍山安養院。これも慈覚大師開山の寺。再三火災・戦災に遭い、今はビルのような建物の5階に本堂がある。寛永元年(1624年)の再興時に、釈迦涅槃像を本尊としたことから寝釈迦寺と呼ばれるようになった。

路地奥の山門の両側に、神社ではないのに一対の狛犬が座している。「宝獅」と



呼ばれる中国の「屋敷の守護神」とのこと。(写真上)

□比翼塚=目黒不動尊の門前にある。白井権八と遊女小紫の悲恋を供養する塚。
□林試の森公園=石古坂(いしこざか)を上って行くと林試の森公園。明治11年(1878年)に北区西ヶ原にあった林野整備局樹木試験所からこの地に樹木を移して、明治33年(1900年)に目黒試験苗園(のちに林業試験所と改称)を開設。昭和53年(1978年)に筑波に移転したことにより、東京都が公園として整備を行い平成元年(1989年)に「林試の森公園」と名付けて開設した。公園のベンチで昼食を食べて、駅に戻った。目黒不動の他にも見どころ満載の街だった。不動前駅を出ると地下に潜ってしまうので、車窓の景色は楽しめない。

●武蔵小山

急行の通過待ちで、しばらく停車。地下にできた、新しく美しい武蔵小山駅は少々味気ないものだった。昔は、駅横にある商店街の賑わいが、電車の中からもわかるような町(駅)だったのに…。

旧小山村の小山八幡神社は、小高い丘の上に建っていて、村の鎮守だった。現在の地名だと、品川区荏原七丁目になる。国土地理院の地形図で確認すると、海拔32m位の高さだが、周囲の高さを考えると顕著な突起ではなく、「小山」という想像はできなそうに思う。宅地開発の段階で削られてしまったのかもしれない。

●西小山

西小山駅を出ると地上に出るが、シェルターに挟まれて、景色は何も見えない。

●洗足

ひたすら住宅地が連なり続ける。ここは目黒区洗足、その南側に大田区北千束があり、北千束の南に南千束がある。

洗足には洗足池がなく、南千束に洗足池がある。よそ者にはわかりにくい。

●大岡山

大井町線に乗り換えできる駅で乗り降りする人が多い。

半地下状態が続き、車窓の旅は面白味がない。駅横にある東京科学大学(旧名東京工業大学)の建物がわずかに見え隠れする。この桜は何度か見たことがあるが見事だった。

「大岡山」は、明治時代には字地名だったようだが、さらに遡った由来は多説あり不明らしい。地形図を見ると海拔35mの丘陵地帯になっている。

武蔵小山と同様に、駅名(地名)が地形を表しているように感じる。

大岡山を過ぎたらようやく車窓に遠景が得られるようになった。

●奥沢

「おくさわ」と読む。地名から素直に考えれば「奥の沢」つまり谷間を感じる。調べてみたら、北沢・馬引沢(のちの駒沢)・廻沢・池沢(のちの池尻)・野沢・深沢・奥沢を「荏原郡内の七沢」と言い、一番奥にあったのが奥沢だったということがわかった。奥沢は、大岡山・緑ヶ丘・自由が丘などの丘陵地帯に囲まれた呑川源流の低地だった。奥沢駅を出ると電車は左にカーブして南に向かう。

●田園調布

東横線が右側から寄ってきて、並走が始まる。

大正7年(1918年)に渋沢栄一らが設立した田園都市開発株式会社によって開発された新しい街で、昭和7年(1932年)に、荏原郡東調布町大字上沼部と下沼部

が合併して、大森区田園調布という町が起立した。駅の西側に扇形に広がる町並みは、美しく、格好よく、上品だと言われてきたが、車社会が進んだ今となっては、走りにくい街並みかもしれない。

新入生と思しきお坊ちゃま・お嬢ちゃまと手をつないだ母子が何組も電車を降りた。

●多摩川

高架を走ってきた目黒線と東横線は階上のホームに入る。目黒線はここが終着駅。階下のホームからは蒲田へ行く多摩川線が発着する。

この駅は、大正2年(1923年)の目黒蒲田電鉄開通の時に開業した。

丸子多摩川・多摩川園遊園地などに改称した時期もあったが、元の駅名に戻った。

駅の西側には南北に広がる小山が座っていて多摩川の流れは見えない。

多摩川台と名が付く小山を登ると多摩川台公園がある。多摩川に沿って走ってきた舌状台地の末端にある、海拔30数m・幅60mほどの細い台地全体が公園になっている。台地の西側には多摩川の流れがあり、蛇行する多摩川の流れを受け止める壁のようにになっている。

公園の中央部から北部にかけては古墳群があり、最も大きなものは亀甲山(かめのこやま)古墳で、全長107m・最大幅66m・最高部11mの前方後円墳。(下写真)



古墳時代中期の4世紀末~5世紀初頭の築造で、多摩川流域では最大のものらしい。亀の甲羅のような形から亀甲山(かめのこやま)という名が付いたらしい。

多摩川の流れ・川崎の高層ビル群・多摩地方の丘陵地などが視界に入り、地形やその成り立ちを感じながら飲む缶コーヒーは、なかなかの味わいだった。

<2> 多摩川線の旅(多摩川から蒲田へ)

●多摩川

改札口に入って、階下のホームに向かい、発車寸前の蒲田行の電車で飛び乗った。右にカーブして多摩川を渡る東横線を見送り、多摩川線は東岸を南東に向かう。

●沼部

駅西側は海拔7m程度だが、東側のさくら坂を上ると海拔20~25mの高台になる。中世には沼部郷という地名が存在していた。また、多摩川を挟んで対岸の川崎市には「下沼部」という地名もある。多摩川の度重なる流路変化によって分割された低湿地帯と考えることができる。(※註)江戸時代には上沼部村と下沼部村があったが、明治22年に調布村の大字となった。昭和7年の大田区田園調布の起立とともに消滅し、駅名だけが残ることになった。

沼部駅を出るとすぐに東海道新幹線と横須賀線の高架の下を潜り抜ける。

●鶺鴒の木

この地にあった鶺鴒木明神が地名の起源とする情報があるが、鶺鴒木明神の存在に関

する情報がないので、定かなことはわからないらしい。多摩川の河口近くにある岸边は鶺の集まる所だった。川岸の数本の樹木が黒く染まるほどに鶺が泊っている景色を想像してみた。

● 下丸子

多摩川東岸の鶺の木の下側に座す町。対岸の川崎市に中丸子・西丸子・上丸子という地名がある(あった)ことから、「丸子」という土地は、多摩川の流路変化によって分断されたと考えられる。

(*註 Appendix:「多摩川を挟んで存在する類似地名」参照)

● 武蔵新田

「むさしにった」と読む。新田義貞の次男義興を祀る新田神社がある。南北朝時代に南朝側の中心にいて活躍した武将。新田義興は、足利側に寝返った家臣竹沢右京亮の計略にはまって矢口渡の船上で謀殺された。延文3年(1358年)に近隣の住民が、霊を慰めようと考えて、墳墓の傍に新田明神社を建立した。新田神社は、駅から徒歩5分ほどのところ(矢口一丁目)にある。

● 矢口渡

大正12年(1923年)の目黒蒲田電鉄の開業時には、駅名は「矢口」だった。昭和5年(1930年)に「矢口渡(やぐちのわたし)」に改称した。駅名の由来である「多摩川矢口の渡」は昭和24年(1949年)まで存在していた。

● 蒲田

終着駅蒲田はいつもにぎやかだ。今日は餃子を土産に買って帰途に就いた。

以上

*Appendix: 多摩川を挟んで存在する類似地名

多摩川右岸の地名	多摩川左岸の地名
中丸子・上丸子・新丸子(川崎市中原区)	下丸子(大田区)
下沼部(川崎市中原区)	沼部(大田区)
下野毛(川崎市高津区)	野毛・上野毛(世田谷区)
押立(稲城市)	押立町(府中市)
瀬田(川崎市高津区)	瀬田(世田谷区)

